

京町家の保全・再生の事例

～日常の「美」を楽しむ～

古建築の保全・再生の事例から

「招喜庵(重森三玲旧宅主屋部)」(左京区)



左京区、吉田神社と京都大学に挟まれた閑静な住宅街の一角に昭和を代表する庭園家、重森三玲^{※1}の旧宅があります。昭和18年に吉田神社の元社家であった

鈴鹿家から重森三玲が譲り受け、その後、茶室やお庭がつくられ新旧融合した社家建築(公家造り)として今に受け継がれています。現在、吉田神社界隈唯一の社家建築としても貴重な文化財産です。

昨年、傷みが激しくなった主屋部を重森家と親交の深い塚本家(和装商社・塚喜商事)が引き受け、今夏、芸術や伝統文化を楽しむギャラリーやサロンとして再生した「招喜庵」が誕生しました。

門をくぐり、招喜庵の戸を開けると、京町家の通り庭を思わせるような雰囲気が漂う、高い吹き抜けのメインの部屋が目の前に広がります。新しい用途に合わせて土間の上に無垢フローリングが張っており、柱や梁が静かにその空間を包みこんでいます。奥の方には、システムキッチンと改修の際復活したおくどさんが仲良く顔を合わせています。



招喜庵の改修工事を行った(株)アラキ工務店は京町家・古民家改修などの「再生住宅」に特化した取組を進めている工務店で、今年7月に財団法人京都市中小企業支援センターの実施する、第11回オスカー認定^{※2}を受賞されています。改修を手がけるときは奇をてらったことはせず昔のままの姿



を復活させることを心がけているそうです。なおかつ、現代生活に適應した住み心地の良さも重視しているそうです。招喜庵の工事でも最新の設備を採用している反

面、黒光りした柱や梁を見て何か塗ったのかと思ひ質問をすると、「特別なことは何もしていない。すべて水拭きで汚れを落とし、油で拭いただけ」という返事に昔のものを守っていく職人さん達の思いを感じました。廊下を歩いていくと、襖続きの和室があります。襖は、重森三玲がデザインしていたものを以前から出入りのあった建具屋さんに依頼して再現したそうです。

半年ほどの時間をかけ、じっくりと進めた工事は一見どこに手を加えたのか分からない雰囲気漂っています。古いまま使いたい、使用目的に応じた直し方をして欲しい、という塚本喜左衛門さん(塚喜商事社長)の希望を職人さん達が腕をふるって実現させた結果がつまった建物となりました。

重森三玲旧宅というと、コマーシャルでおなじみの「お庭」が連想されます。しかし、主屋部が招喜庵として文化施設に生まれ変わったことで、建物の中につままっている柱や建具、欄間などの魅力を楽しみ、さらに建築と庭の一体となった「美」を感じることでできる空間になったのではないかと思います。重森三玲のお孫さんで、重森三玲庭園美術館(旧宅書院庭園部)の館長をされている重森三明さんは、「三玲は『住宅は個人の美術館である』と位置付けていた」とおっしゃっています。今は美術を鑑賞しようと思うと、美術館などへ行きますが、昔は調度品であつたり絵を飾つたりと、個々の家で「美」を楽しんでいました。そのような日常での「美」を楽しむ心を見に来た人に感じたいとのことでした。



京町家や古建築は伝統や文化を感じることができる魅力ある空間ですが、空間自身が持つ魅力だけでなく、住む人の「大切にしよう」、「日々の生活を楽しもう」という気持が住まいをより一層生かしているのだと思います。このような生活に密着した「美」に触れ、私達の生活空間を見直し、考えることが、「まちづくり」にもつながっていくことになるのではないでしょうか。

※1 重森三玲：(1896(明治29)年—1975(昭和20)年)

作庭家、庭園史研究者。力強い石組みとモダンな苔の地割で構成される枯山水庭園を手がける。

代表作/東福寺方丈庭園、大徳寺山内瑞峯院庭園、松尾大社庭園など。

※2 オスカー認定：

元気な中小企業の方々が、さらに元気になっていただくために、事業計画「VC(=Value Creation)プラン」の策定や実行を支援する制度。平成14年に始まり、平成18年11月までに京都市内の73社が認定を受けている。